

7月

【収藏品紹介】
金井紫雲著『盆栽の研究』（隆文館、大正3年）②

『盆栽の研究』は、明治・大正期の新聞記者・金井紫雲が執筆した盆栽の研究書です。前号（2021年6月号）では、本書が単に培養法に留まらず、「盆栽の趣味」なる章を設けて「趣味的方面の研究」を試みた背景について考察しました。が、本書の特徴としては「観賞（鑑賞）」や「陳列法」への深い言及も挙げられます。

目次を見ると、「盆栽の歴史」に続いて「盆栽の観賞」「盆栽と鉢」「盆栽の種

類」の3つの章が設けられていますが、これらはいずれも「観賞」の観点から記述されている点に共通項が見出せます。例えば、「盆栽の種類」では、まず現在の盆栽界において盆栽として取り扱われている植物の数は「数百種」に上るとしつつも、しかし「真に盆栽として行なはれて居るものは案外少数である」として、その数は限られていると述べています。

金井はこの限られた盆栽の種類を「鑑賞上」の観点から10項目に区分しています

表1. 「盆栽の種類」の区分

区分	樹種
1 四季を通じて観賞を得べき常緑植物	黒松、赤松、五葉松ほか
2 春季における花の観賞を主とするもの	梅、迎春花、寒木瓜ほか
3 夏季における花の観賞を主とするもの	石榴、梔子、丁子桂ほか
4 秋季における花の観賞を主とするもの	茉莉花、木犀、紫丁木ほか
5 冬季における花の観賞を主とするもの	山茶花、冬至梅、梅（初雁）ほか
6 発芽前後の美観を主としたもの	柳、落葉松、もみじ、楓ほか
7 夏季緑葉を主に観賞するもの	竹類、柳、ギョリュウ、もみじほか
8 秋季紅葉もしくは黄葉を観賞すべきもの	もみじ、楓、ハゼほか
9 夏季および秋季冬季にいて果実の観賞を主とするもの	石榴、野木瓜、アケビほか
10 冬季落葉後の樹容を観賞するもの	梅、フジザクラ、柳ほか

「表1」）。この区分では、四季にともなう盆栽の変化＝見ごろ・見ごろを基準に、ひとつの盆栽＝樹種が複数の項目に分類されており（例えば、もみじ）、現在の樹種、あるいは樹形を基準とした分類とは大きく異なること

が指摘できます。金井の区分は、四季の「観賞」を基準としており、金井の関心が「観賞」に置かれていたことがよくわかります。

その「盆栽の観賞」の章では、冒頭で、絵画や彫刻などの「芸術品」と同じように盆栽を「観賞」する場合は、陳列の位置や意匠に注意を払う必要があるとして、次のように述べています。

「其の陳列意匠も、唯雑然として何の按排もせず陳列したのでは、唯に無趣味なばかりでなく、樹其物の美観まで、傷（そこな）かやうになる、同時に同じやうな盆栽でも、其の配合如何に依つては結好趣味のある陳列となるのである、要するに盆栽の陳列も、適物を適所に配すると云ふ用意が缺けてはためなのである」。

ここで金井が重要視する「適物を適所に配すると云う用意」とは、盆栽の「陳列法」を指しており、これ以降、「陳列法」の具体例が紹介されていきます。このように「盆栽の観賞」と題されたこの章の主眼が、見て楽しむ方法の紹介ではなく、趣味者の側の「陳列法」の紹介に置かれていることは、本書の性格を考へるうえで注目する必要があります。

表2. 真体・行体・草体の陳列法

	陳列の趣旨	床の間	床脇	盆栽
真体陳列法	なるべく荘厳な意匠を主とする	○掛幅 ・書/真書、隷書、行書 ・画/彩色の細かい筆法の精緻な密画 ○香炉（銅・陶製）+香机・香炉卓 ○香合箸瓶その他付属品 ○花瓶（銅製） ※薄板（矢筈板）	○文房具、帖巻置物 ○盛物/霊壁石・霊芝 如意・数珠・払子等	松柏を基本として、季節と場所に考慮して選択する
行体陳列法	真よりもやや簡略になる	○掛幅/主に山水画 ○香炉（真よりも形式の簡略なもの） ○花瓶（陶製）※薄板（蛤端）		季節を考慮し、掛幅や置物等に因んで、一種の風格を具えたもの
草体陳列法	瀟洒で淡泊な趣味を主とする	○掛幅 ・書/草書 ・画/一筆書きの瀟洒なもの、俳画 ※白鍔花籠に掛幅に因んだ草花を挿す		瀟洒で飄逸なもの

この「陳列法」については、最初に「普通の陳列方法」として、床の間には季節や場所に依つた書画の掛幅および卓などに載せた香炉を飾り、床脇には茶道具や瓶花、床柱には払子や珠数、霞棚や袋棚には木彫などの置物、盆栽は床の間の近くに敷いた青氈の上に卓を置いて載せ、金屏風・白屏風・風炉先屏風などを廻らす、と具体的に解説されています。さらに金井は、こうした「一般的な陳列法」を「造庭法などの例に依つて」、さらに「真行草と区別してある」として、真体・行体・草体の3つの「陳列法」を紹介しています（表2）。ここから、本書が刊行された大正3年時点で、盆栽界において真行草の飾りのあり方が確立していたことがわかりますが、これまでの盆栽の書籍では「陳列法」についての言及はなく、先の「普通の陳列方法」も含めて、その方法を明文化した点に、本書の意義が認められるでしょう。

金井は、本書の「例言」に、「鑑賞上最も重要な陳列法、室内装飾法等に就いては殊に意を用ゐて記述した、之は単に植物を見ると云ふばかりでなく、其の応用をも示す為めである」と記しており、本書において「陳列法」の記述に意を用

いたこと、それは単に「植物を見る」ばかりではなく、「応用」＝飾りの方法の紹介を意図したものであると述べています。金井は意識的に「陳列法」の記述を挿入しており、それは趣味者による陳列の実践が想定されていたのです。この点と関わって注目したいのは、本書の後半（下編）の樹種ごと「松」「梅」の解説です。ここでは樹の来歴や語源、故事伝説など、いわば「趣味的方面の研究」が記されているのですが、これは「日本の和歌俳句等の有名なもの、或は夫れに関する故事伝説口碑等に因つて陳列するの趣味がある」という考えに基づいたもので、これもまた陳列の実践の「参考」となることが意図されていました。

金井は随所で「趣味の深さ」の重要性を語っていますが、「陳列法」はまさに「盆栽の趣味の深さ」を物語っています。前号では本書の背景に明治40年頃に活発化した、知識人による「趣味」の啓蒙運動の存在を指摘しましたが、本書が語る実践的な「陳列法」の紹介に、「盆栽の趣味」の啓蒙的な側面を見出すことができるとは思いません。

（学芸員 林 進一郎）